

(3) カルデシズムの場合

ペドロは妻との不仲が理由で離婚し、さらに自身の動物病院の経営不振などに悩んでカルデシズムに1年間通った。そこでは苦しみの原因がカルマ（因果の法則）にあるため、それまで自覚していなかった過去の罪を償わなければならないと教えられた。しかし、すでに紹介したアウグスタ同様（Vol. 17 No.6）、その考え方が理解できても納得はできなかった。その後、生長の家ではカルマを越えることができると説いていると知り合いに教えられた。そこで生長の家サンタフェ道場（バイーア州サルバドール市）で行われる1週間の練成会に参加することにした。道場は彼が住んでいるオリンダ市から800キロ離れたところにある。彼は練成会で学んだ教えに納得し、教化部で行われている青年会の活動にも毎週2回は出席するほど熱心な信者になった。

入信して3年が経ち、生活はととても改善しました。生長の家で知り合った女性とも再婚できました。もうすぐ子供が産まれます。生長の家で学んだことは「今、ここ」で最善を尽くすということです。職場だけでなく、どこでもそのように心がけることが大切だと学びました。私には前妻との間に墮胎した子どもがいます。カルデシズムでは墮胎した子供の霊が私の不幸を引き起こしていると言われました。しかし、そもそもの原因は、子供を墮胎することになった私のネガティブなカルマにあるということです。そのため前世や私自身の過去の罪を償わなければならないと教えられました。前世のことは私には自覚がないわけですから、それ（過去の罪を償うこと）はととても大変です。生長の家でカルマは乗り越えることができると知りました。それで生長の家で活動するようになったのです。私は、今の方が以前よりももっとエスピリタ（心霊主義者）だと思います。カルデシズムでは人間には自由意志が備わっていると説いていますが、優れた諸霊の力の方が私たちよりもずっと影響力を持っていて、救済してくれるのはそのような霊だといえます。人間の自由意志はそうした霊ほどには力が及ばないということなのです。そういうことにも同意できなくて、私はカルデシズムから離れました。カルデシズムの教えには自己犠牲的なものが感じられます。

ペドロの語りは明快で論理的である。彼は自覚できない前世の罪に苦しめられなければならないのは理不尽だと理解する。そして、カルデシズムでは過去生の罪を償う方途として慈善活動の実践を勧めるが、他者に尽くすことは自己犠牲的だと捉えている。彼は前世を含めた自身の罪の重みを感じながら日常生活を生きるよりも「今、ここ」でそのような重みを超越することを求めた。それは、生長の家が説く「人間・神の子」という人間観と神観（Vol.16 No.3）、そしてそれらに基づく救済観の獲得によって達成されたとみられる。「人間・神の子」とは直覚的な人間と神との合一という認識を生むと考えられるが、人間が神の高みに立つことができれば、もはや罪からの苦しみを負う必要はない。神との合一とは時空間の超越に他ならず、それは「今、ここ」に収斂する。

彼はカルデシズムに通っていたときよりもさらに心霊主義的になった（「もっとエスピリタ」になった）という。ブラジルの宗教風土の重要な基盤をなす心霊主義は、アフロブラジリアン宗教とカルデシズムに代表される。ここではペドロが生長の家を心霊主義と見做し、それをより優位に位置付けていることがわかる。そこで彼がそのように考えるようになった理由を理解するために、これら二つの宗教が説く霊界のありように着目してみたい。

カルデシズムでは霊界は様々なレベルの階層からなると説き、霊はそれぞれの「進化」のレベルに相応しい世界（霊界）で生き、徳分に応じて上層階へ進化するという（「霊の進化」）。生長の家でも霊界には様々なヒエラルキーがあると説くが、「今、ここ」で「真相」という完全円満な霊になりうるという（「人間・神の子」）。すなわち、生長の家の教えによれば、「霊の進化」は一足跳びに神の領域へ到達することになる。それは、神想観とよばれる瞑想法によって達成される（Vol.16 No.3）。それはまた、上級霊に頼ることのない自助による救済である。人間の自由意志が神と合一し得る力を持っているとするなら、人は霊界の優れた諸霊を頼る必要はない。この意味で、ペドロは生長の家の教えがカルデシズムより優れていると理解した。そこには神以外の他者に頼らないという孤高とさえ感じられる自律的な人間像が垣間見える。

次に、生長の家における自助について彼の語りを見ておこう。

カルデシズムではパッセがあります。パッセをしてもらうことで磁気エネルギーを受けて病気が治るとされていますが、それでは「内から外に向かう」成長ができません。「外から内」に受け入れるだけでは、私たちは外部に依存する人間になってしまいます。しかし、生長の家では神想観をすることで「内から外に向かう」成長を遂げることができるのです。「人間・神の子」の教えを知り合いに伝えたとき、そのような考え方は神に対する傲慢だとか、人間の自惚れだと言われたことがあります。しかし、いわゆる謙遜な心は、人間が神の子で神性を持っているという事実を隠すことになるのです。神性を隠すということは、神そのものを人間から遠ざけてしまうことになるのです。生長の家では、そういうことが罪だと説いているのです。だから、謙遜は美德だとは考えられません。

人間が本来神の子として神性を備えた存在であるという考えはキリスト教的なコンテキストでは受け入れられにくく、「神に対する傲慢」や「人間の自惚れ」だと言われることがあるという。とはいえ、ペドロはシュライエルマッハーが言うような超越的実在への「絶対依存の感情」を否定しているとは思えない。彼は神を超越的実在として見做しながらも、「真相」という生長の家の人間観に基づいて人間をその高みに位置付けている。彼が言う「内から外に向かう」成長とは、そのような自己認識を表現したものである。こうした思考様式は、ニューエイジ運動や精神世界といった教団宗教の枠組みにとらわれないポストモダン的な宗教意識につながっているとみられる。